

内田クレペリン精神検査^{注1}における健常群判定の 学校相談および人事考課への運用に関する研究

A Study of Applying Results on Mental Health which is Evaluated by the Uchida-Kraepelin Psychodiagnostic Test to School Counseling and Personnel Evaluation

安 富 由美子^{注2}

YASUTOMI Yumiko

抄録：日本独自の心理検査である内田クレペリン精神検査は、作業検査法の特性を生かし、高次の情報処理すなわち価値判断等の意識的介入ができない、あるいは介入を必要としない単純な連続加算作業を行わせて心理的負荷をかけ、日常における生活体の機能的側面（取り掛かりの良し悪しや持続性、慣れの速さ）すなわち器質的・気質的特性を引き出そうとしている。ゆえに、生活体がどのような環境下で行動するかにより、適応状態の第三者的判断や本人の満足度が異なることを理解したうえで検査を利用する必要がある。本稿では事例研究を通して内田クレペリン精神検査の診断で示される健常度に関する5群類型（適応性の指標）が意味するものについて考察する。学習された行動パターンと生来の特性との関係を、検査結果を通して考察することにより、人格の理解が促進され、能力開発や問題解決のための指導と人事配置が成立するのである。検査結果を教師や指導者が語句の個人的なイメージに引きずられて主観的に解釈・断定することは心理検査の適切な運用とは言えない。検査結果の活用においては、被検者の日常行動に照らして検査結果を解釈することによって、能力開発や予防措置などの展望を持つことが望まれる。

著者キーワード：内田クレペリン精神検査、健常群、非定型特徴、教育相談、人事考課、適応

問題提起

内田クレペリン精神検査は、精神医学者エミール・クレペリンの作業検査法による研究を出発点として、心理学者 内田勇三郎が臨床経験と膨大なデータ収集に基づいて開発したものである。内田クレペリン精神検査は被検者に対して、一桁の連続加算という計算能力が介入しない^{注3}単純作業によって心身に負荷をかけるという、被検者の意図的操作の及ばない作業検査法を採用することにより、「仕事ぶり」の特徴を明らかにしようとする目的を持つ、日本独自の心理検査である。内田クレペリン精神検査の解説用語でもある「仕事ぶり」とは、生活体の行動の生理的背景、すなわち器質的・気質的機能の特徴により発揮され、後述する「発動性・可変性・亢進性」の3特性によって記述される。

内田クレペリン精神検査は現在、教員採用をはじめとする人事採用や人事考課、学校における生活指導や進路指導を含む学校相談、運転適性検査などの目的で広く利用されている。一方で、心理検査の運用に対する理解が足りないまま利用し、検査結果を生かせない状況も珍しくない。例えば、人事採用において健常群か否かによる「足切り」検査として利用するのは、人材発掘の点からは非常に惜しまれる用い方である。なぜなら、健常群でなければ優秀な成果をあげられないとは断定できないし、準健常群や非健常群だからといって何らかの問題を起こすとは断定できないからである。非健常群や重度非健常群に分類される者が目覚ましい成果をあげる例も戸川（1940）に明らかである^{注4}。

また、クラス担任による定期面接で検査結果を根拠に児童生徒に対して「このような欠点があるから直せ」などと一方的に指導することも、発展途上にある児童生徒の尊厳を無視した態度である。上記の問題は学校現場における児童生徒の能力開発や組織における人材発掘の点でも惜しまれ、改善が求められるところである。

本稿では、内田クレペリン精神検査の特徴を生かした利用について、検査の原点に立ち帰って考察し、学校相談や人事採用・考課において本来的な活用ができるよう、利用者に提言することを目的とする。

内田クレペリン精神検査の沿革

精神医学者エミール・クレペリンはデータ収集の目的で一桁の数字を縦に並べた作業検査用紙を開発した。使用法は、印刷された上下の数字を足した答えを字間に記入し、単位時間の号令とともに鍵の手を記入し、5分間計算を続けるというものだった。すなわち、検査法・診断法ともに確立された内田クレペリン精神検査とは異なり、クレペリンのデータ収集法では単位時間は定められておらず、一般に提供する心理検査というより、作業量や作業経過に影響を及ぼす諸条件や作業経過を決定する要因を研究するための手段として用いられていたというのが実態であった。一部の文献で内田クレペリン精神検査を指して「クレペリン検査はドイツの検査である」という認識を示しているが、呼称も内容も誤りである。内田クレペリン精神検査成立の経緯を指して、戸川（1979）は「＜内田検査＞と呼んだとしても不当ではない」と論じている。

内田はクレペリンの研究に関心を持ち、松沢病院などのフィールドでデータの収集・分析を重ねる過程で、現在用いられている横書きの検査用紙や、1分単位で改行、前期15分実施→5分休憩→後期15分実施という検査方法を確立する一方、適応的問題を抱えていない被検者1万人のデータに基づく定型^{注5}を発見し、健常群判定の基礎を築いた。

戸川（1979）によれば、「人間の異常な行動を専門とする精神医学者であるクレペリンやその後継者たちが作業の決定因に専ら着目しており、作業経過の正常・異常については検討項目としていなかった（少なくとも文献として残さなかった）点は興味深い。」クレペリンらに対して内田は被検者の「仕事ぶり」を記述することで、日常に観察される行動の諸特徴に対する理解を助け、適材適所の実現に貢献することを研究テーマとしていた点も、内田クレペリン精神検査の独自性を物語る。

内田クレペリン精神検査の診断方法

診断では平均作業量が④、A、B、C、Dの5段階の作業量級に分類され、作業曲線^{注6}に

における定型・非定型の特徴の有無と度合が平均作業量に応じて診断され、最終的に24類型 (a、a'、a' ~○に a' f、○に a' f、○に a' f~○に f(A)、○に f(A)、fp、a、a'、a' ~a' f、a' f、a' f~f(A)、f(A)、b、b'、b' f、b' f~f(B)、f(B)、c、c'、c' f、f(C)、d、dp：下線部は赤字表記、その他は青字表記、赤字は非定型特徴を示す) に分類される。

非定型特徴が示唆する日常行動の特徴を列記すると以下になる。

- ① 誤答の多発：自己顕示的行動、プレッシャーにより平静さを失う傾向、固執的行動、抑制を欠いた攻撃性の発揮など反社会的行動
- ② 作業量の落ち込み：ぎごちない行動、注意の欠落によるケアレスミス、注意散漫、意識の途絶
- ③ 作業量の突出：うっ積傾向、突発的な感情表出
- ④ 作業曲線の激しい揺れや傾向不定の波：情緒不安定、過敏さ、被影響性、気分や感情の浮き沈みの激しさ、気分や感情に支配された言動
- ⑤ 平らな作業曲線：無感動・無関心な非社会的態度、平然と遂行される冷酷・残忍な行動
- ⑥ 適度な揺れを欠いた作業曲線（定型の骨組みのような曲線で終末部が直線的に上昇した形）：反抗的な態度、批判力、検査に対する作為的行動（定型曲線を故意に出そうとした結果）
- ⑦ 後期の作業曲線冒頭部の著しい低位：仕事の取り掛かりの悪さ（通常の調子が出るまで時間がかかる）、慣れの遅さ、寝起きの悪さ、頑固一徹、選り好みの激しさ、極めて勝ち気
- ⑧ 後期作業量の下落：気力の衰弱、気うつ（他の特徴との組み合わせによっては自殺傾向）、力み過ぎによる変調状態
- ⑨ 作業量の著しい低さ（D段階）：適応力の著しい不足、知的障害^{注7}
- ⑩ 曲線範囲の過大：大きな気分の波、抑うつ気分、あせりによる変調状態

以上の非定型特徴の有無・度合に加え、次に挙げる定型特徴の度合も診断する。すなわち、①前後期初頭部の高さ、②前期作業曲線の終末部が初頭部よりも低いU字型、③後期平均作業量の前期からの上回り（練習効果）、④後期初頭部の相対的な高さ（全作業中最も高い位置にある）、⑤後期作業曲線の右下がりの骨組み、⑥前後期作業曲線の適度な波（単位時間ごとの作業量の増減）、である。

内田クレペリン精神検査の判定において適応性の指標^{注8}とされるのは5群類型、すなわち、高度健常群、健常群、準健常群、非健常群、重度非健常群の5群類型である。判定は平均作業量に応じて作業量級を判定した上で、定型特徴の顕著なものが高度健常群、定型特徴は顕著ではないが非定型特徴や著しい崩れが認められないものが健常群、定型の崩れが前後期ともに見られるもの及び軽度の非定型特徴が認められるものが準健常群、非定型特徴が明らかであるもの及び軽度の非定型特徴が複数認められるものを非健常群、非定型特徴が著しいものを重度非健常群と診断する。

性格・特性診断では、作業曲線の特徴と5群類型を加味して推定される日常的行動の特徴が診断される。前後期の初頭（加算作業の開始時）の高さ・作業曲線の波の打ち方や揺れ幅（作業曲線の範囲）・前後期作業曲線の終末部の高さ、の3点をそれぞれ発動性・可変性・亢進性と呼ぶ。発動性は仕事の取り掛かりの良し悪しや同調しやすさ、寝起きの良

し悪しなど行動のスタートに関わる特性、可変性は情緒の安定性すなわち作業の安定性といった気分の行動への影響性を示す特性、亢進性は作業興奮（作業という大脳生理過程への負荷による神経興奮の度合）や持続性を反映する特性として診断される。内田クレペリン精神検査の性格・特性診断は、非定型特徴に鑑みて出されるものであり、「仕事ぶり」の生理的特徴、つまり器質的・気質的特徴が、適応的に機能する可能性が高いと推定されるのか、あるいは不適応的に機能する可能性が高いと推定されるのかを説明しているのであり、現実像の適応—不適応状態と必ずしも一致するとは言えない。

方法

本稿は内田クレペリン精神検査の誤用を避け、適切な運用を促すことを目的としている。そのため、検査結果が誤解されやすい準健常群、非健常群、重度非健常群（以下、「非健常群等」と表記）の事例を取り上げ、学校や社会における検査結果の捉え方と運用について考察する。したがって被検者は中学生、高校生、大学生、社会人である。

幸い、内田クレペリン精神検査の開発者である内田勇三郎が設立した日本・精神技術研究所には開発当時から膨大な臨床データが蓄積されている。今回は同研究所の協力を得て、蓄積されたデータの中から非健常群等に分類され、行動観察記録が残っており、匿名性が確保されているもので、問題行動が認められない事例を抽出する。次に、学校相談や人事考課の手順に従い、各事例の判定解説と判定文を示した上で臨床所見を示すことにより、両者が一見矛盾する印象を与える可能性を指摘する。最後に考察で判定文と日常所見をどのように対応させ、被検者の指導や配置、能力開発につなげるかについて提案する。

事例と考察

各事例冒頭に作業量級と5群別判定、非定型特徴の有無と程度、3特性判定を示し、（ ）内に被検者の年齢、性別、学年／職業、データ元を示す脚注を記す。掲載図版は事例の検査済み用紙である。（作業曲線のみを未使用の検査用紙に書き写したものではない。）

①B段階非健常群、非定型特徴なし、発動性不足・可変性中程度・亢進性過度（17歳、男、高校3年^{注9）}）

判定解説 作業量がB段階で仕事ぶりは比較的ゆったりしたテンポであるため、周囲の様子をみながら効率的に調子を合わせていくのは得意というほどではないと推定される。よって、前後期ともに定型特徴が崩れているだけで非定型特徴はないものの、非健常群となった例である。

判定文 周囲に合わせることは得意ではない。環境や仕事の内容に慣れるまで時間がかかるほう。好き嫌いがはっきりしており、選り好みする傾向がある。好きなものはとことん追求し、疲れを知らない。夢中になるあまり、強引になることもある

クラス担任所見 非健常群とは意外である。クラス委員でもあり、クラスをまとめ、最も頼りになる生徒のひとりである。非健常群と3特性についての解説を聞き、納得した。

考察 本事例の「発動性不足、亢進性過度」、「B段階非健常群」にはありがちの感想とも言えるが、担任が検査結果に自分の所見を合わせず違和感を指摘した点は運用上望ましい。なぜなら、非健常群とは適応範囲が狭いことや不適応状態にある可能性は示しても、

現在不適応状態にあることを断定はしていないからである。担任が検査結果の捉え方について理解を深めたことにより、検査結果が生活・進路指導に活用されることが期待できる。本稿冒頭でも言及した通り、非健常群等は適応範囲が限定的であっても、環境が被検者に合う（被検者にとって居心地が良いと感じられる環境や、行動特性が長所として歓迎される環境下にある）ならば、持てる能力を存分に発揮でき、時として高度健常群や健常群よりも優れたパフォーマンスを発揮する可能性もあるからである。

本事例は、クラスという社会的環境が男子生徒にとって好ましいものであったため、十分に特徴を生かすことができ、周囲からも評価された例である。したがって、健常群の条件を満たしていないということの意味としては、どのような環境においても周囲に合わせていく柔軟性には欠けるものの、環境さえ本人にとって望ましいものであるならば、十分に適応的な行動が望め、優れた資質を発揮する期待さえ持てることを示唆するものである。被検者の自己理解と将来展望を支援するには、検査結果の含意を確認し、将来的に適応が難しい環境に置かれた場合、どのように対応することが望ましいかを共に考え、被検者が自分の特性を生かすという視点から問題解決を図れるように導くことであろう。児童生徒や従業員を教育・登用する際に指導者や雇用主に求められるのは、検査結果を解釈する姿勢を忘れず、柔軟で注意深く、建設的な態度であるという指針を示す事例である。

②④段階準健常群、非定型特徴：軽度の後期初頭部低位、発動性不足・可変性中程度・亢進性過度（年齢不明、男、タクシー運転手^{注10}）

判定解説 本事例は、次の理由により運転適性が低いと診断されるものである。すなわち、発動性不足による選り好みと負けず嫌い、亢進性過度による物事への熱中傾向が、運転中に追い越された場合に抜き返さなければ気が済まない傾向につながり、夢中になるあまり周囲への注意が欠落して事故を起こすことが心配されるからであり、事故頻発者の検査結果には同様の傾向が認められることは外岡（1979^{注11}）も紹介している。

判定文 選り好みの凝り性。好き嫌いがはっきりしており、環境への慣れに時間がかかる。自主性がある。一途になりやすく、なかなか自分を曲げない。自動車運転においては、追い越されたら追い越し返さなければ気が済まない傾向にあり、事故が懸念される。

被検者による所見、実績 本被検者は無事故無違反で所属タクシー会社から表彰されている。被検者によれば「自分は運転中に追い抜かれたら抜き返さなければ気が済まない。しかし、自分の性分は交通事故につながりやすいと理解した。事故を起こしたらプロドライバーとして好きな運転の仕事を続けられなくなるので、自らの戒めとして、追い抜かれても絶対に抜き返さないと決めている。」とのことである。

考察 本事例の検査結果がでたらめでないことは、診断結果を本人が認めていることで明らかであり、検査結果の運用という点で理想的な事例である。すなわち、検査を通して被検者が自分の特性を理解し受け止め、自らが陥りやすい問題を明確に意識した結果として、「より適応的な」行動のためのコントロールを自発的に実践していることである。また、被検者の意志を尊重し、実践を見守り、奨励した会社の雇用姿勢も手本と言える。

③④段階健常群、非定型特徴なし：軽微な散在性誤答、発動性中程度・可変性中程度・亢進性中程度（16歳、女、高校1年：Figure 1^{注12}参照）

判定解説 非定型特徴とするほどではないが、誤答が全体に散在している検査結果である。健常群ではあるが、散在性誤答の参考事例として取り上げる。

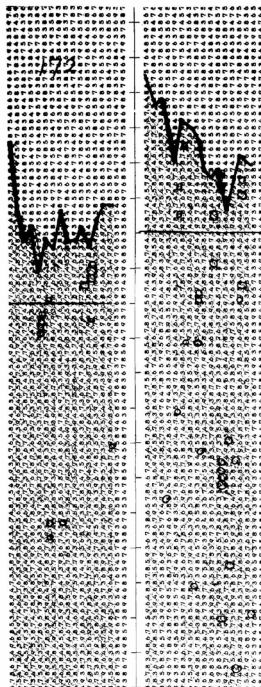


Figure 1. 事例③

場面では、その才能を発揮することが期待される。特に未成年の健常群においては、自分の特性を理解し、不適応状態に陥った際に噴出する可能性のある課題についても理解することで、自己統制に意識的にになれる。持ち味を生かせるクラスでの役割分担を実現したり、

進路選択を支援したりするための進路指導や生活指導が学校相談において望まれる。

④ A 段階非健常群、非定型特徴：大きな落ち込み、発動性不足・可変性中程度・亢進性中程度 (14歳、女、中学3年：Figure 2^{注13}参照)

判定解説 前期の深い落ち込みに加え、後期にも軽度の落ち込みがあるので、明らかな非定型特徴により非健常群となる。

判定文 気乗りがしにくく即応性に乏しい。芯が強く物事をやり抜く。好き嫌いがはっきりしており、凝り性。時々動作が滞り、ぎこちなさが目立つ。

クラス担任所見 気取りやむら気はなく、時おり何もわからない状態に陥る。(外岡1978^{注13})

考察 担任の所見からは、現時点で適応上の問題はおおむね認められないと言えそうである。発動性不足という作業曲線の特徴からも、むしろ慎重なほうであろう。所見の気取りやむら気のなさに通じる。一方、器質的背景には「時折何も分からない状態に陥る」という記述が示すように、意識の

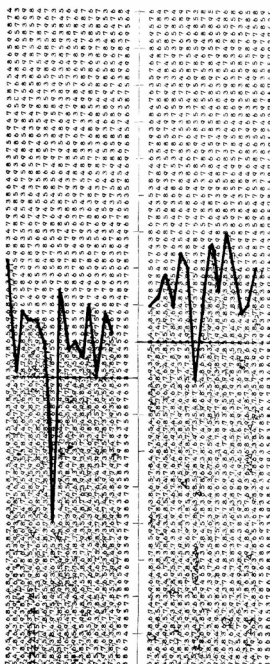


Figure 2. 事例④

途絶する状況が垣間見える。学校生活においては、体育や重い機器の移動などで自分や他者の安全を管理しきれない可能性もあり、指導者の注意深い見守りが必要であろう。これには、てんかん発作が背景にある可能性もあるため、早期に専門機関で診断を受けることも望まれる。発達的には、てんかん発作の放置は獲得された知能の損傷・喪失が懸念されるが、早期に適切な処置を行えば、意識の途絶を極力抑え、将来的な治癒もあり得るからである。

本事例では、非定型特徴に関わる行動特徴を除けば、生活面で問題とされるような逸脱行動がない点も、非健常群の理解において重要である。確かに、非定型特徴は深刻な問題(事故)の可能性を示唆し、発生を未然に防ぐための対策が早急に望まれるが、対策さえ立てられれば最悪の事態を免れ、対策が功を奏すれば何事もなく過ごす期待すら持てるのである。学校現場の課題として考えるならば、本事例のような非健常群の教え子に対して、定期面接などで「適応性がない」「事故を起こす」などと否定的・悲観的な面を強調したり断定的な発言をしたりする指導者の態度はラポールの点からも好ましくない。教師と児童生徒の信頼関係を損ね、修復不能にする恐れさえある。

⑤ A 段階準健常群、非定型特徴：軽度の大きな突出、発動性・可変性・亢進性ともに中程度(14歳、男、中学3年：Figure 3^{注14}参照)

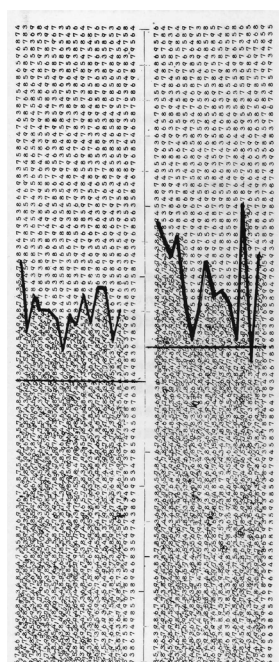


Figure 3. 事例⑤

判定解説 前期を見ると作業曲線が横ばい状態にあり、連(複数行にわたる同作業量)もあるため可変性不足傾向にあるが、後期に曲線範囲が大きくなるため、判定では可変性中程度とする。

判定文 粘り強いが頑なになりやすく円滑性が不足している。急に気が高ぶり、唐突な言動が生じやすい。

クラス担任所見 「時おり物凄く怒り、人をなぐったりする。平素も気が強く赤ら顔。」(外岡1978^{注14})

考察 所見では判定文にあるような粘り強さが指摘されていないが、目立つ特徴として挙げられなかったのか、普段から認められないのかは不明である。いずれにせよ、定期面接等で本人の長所として伝えることにより、自信を持ったり、長所として発揮する意欲を持ったりすることができれば、暴力的にふるまうような逸脱行動を抑制する努力につながると期待ができる。自己理解という点では、意志の及ばぬ器質的特性として欲求不満による攻撃性を暴力的行動で表出しやすい傾向があることを本人が受け止められるように、共感的に寄り添いたい。自分の特性として受け止めることが、事例②

のような自主的コントロールを可能にし、衝動的行動を引き出さない環境づくりなど、具体的で実行可能な対策を検討し実践することにつながるからである。

⑥ A 段階準健常群、非定型特徴なし：軽微な動揺の欠如、発動性不足・可変性不足・亢進性過度(15歳、男、中学3年：Figure 4^{注15}参照)

判定解説 発動性・可変性・亢進性の3特性のどれにも過不足がある典型例のひとつである。前後期ともA段階としては曲線範囲が狭く、後期初頭部が低く尻上がり構造を持

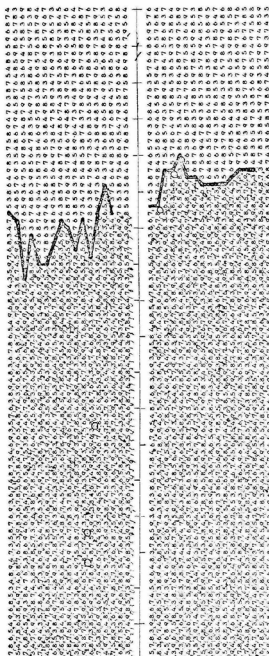


Figure 4. 事例⑥

り込み、徹底しているがために、頭ごなしに否定的な対応をしようものなら、猛反発して独善的な態度を強めるか、自らを否定された気がして意欲を失ってしまう恐れもある。自主性があり、決めたことはやり抜く意志の強さが、時には妥協を許さない一途さや固執傾向につながり、柔軟性に欠けた行動に走る場合もあると本人が受けとめることで、重要な目的を達成するため行動を制御する余裕も生まれることが期待される。

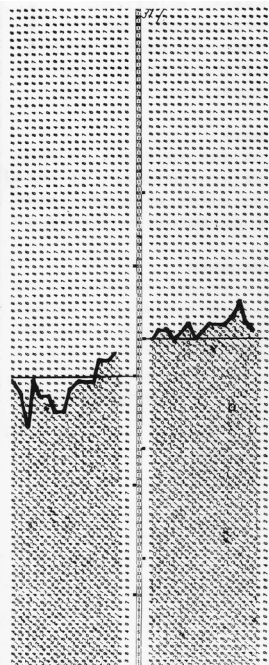


Figure 5. 事例⑦

ち、作業曲線に連が複数あり、動揺の欠如が明確である。

判定文 あまり表立たないが自分のやり方を押し通す。他に左右されず非妥協的。なかなか自分を曲げない。

外岡 (1979^{注15}) による担任への聞き取りと所見 「小学校1年生の頃、学校へ一人で行かず、父の上着を握ったままだったり、絵をかかず、母がいるのか否かを気にしたりする。ひとりで通いだったが、6年生の姉のところへ走って行き、離れなかった。2年からだんだん成績もよくなった。3年からクラス委員になり、6年まで続く。本人は仕方なしのようであるが、中学でも委員をしている。ノートは非常にきれいで、宿題などは徹夜で泣きながらでもやり抜く。気に入らないと作品を提出しない。家の中が片付いていないと嫌がり、母親の出しっ放しのものを片付けてしまう。ノート2冊に40日間の克明であらさな日記をつける。鋭い観察力を持っている。」(現代の事情を考慮し、一部表現を改めた。)

考察 所見・判定文ともに明らかなように、本事例は敏感さと鈍感さという、相反する特性を内包した気質、すなわちシソチームの典型的な事例である。思い込んだら一途にのめり込み、徹底しているがために、頭ごなしに否定的な対応をしようものなら、猛反発して独善的な態度を強めるか、自らを否定された気がして意欲を失ってしまう恐れもある。自主性があり、決めたことはやり抜く意志の強さが、時には妥協を許さない一途さや固執傾向につながり、柔軟性に欠けた行動に走る場合もあると本人が受けとめることで、重要な目的を達成するため行動を制御する余裕も生まれることが期待される。

内田は自らのシソチームと「作業障害」(円滑性の欠如)の傾向を気に病んでおり、その記述を明らかにしたいとの思いに内田クレペリン精神検査の開発・研究へと駆り立てられていた。検査結果により自らの行動特徴に説明がついたことで、改められない特異性という強迫観念から解放されたことは、長男の内田純平(1983、1995)が記述している。

⑦ A 段階準健常群、非定型特徴なし：前後期初頭の低位、発動性不足・可変性不足・亢進性過度(40歳、男、会社員：Figure 5^{注16}参照)

判定解説 本事例は事例⑥同様の3特性の組み合わせであるが、穏やかな態度の作業曲線である。事例⑥に比べて丸みのある作業曲線であることに注目したい。

判定文 自発性や即応性には乏しいが、物事に対して気負わず周囲に同調順応的。気持ちや動作にむらが多く、マイペースで疲労感が少なく、持久力があり頑張りが利く。

外岡 (1978^{注16}) による所見 「重厚、にこやか、地味。気が

利くとかとっさの機敏さは期待しがたい。口が重く、暖かみをもつ。」

考察 本事例は、社交的ではないが協調性は認められるという特徴が判定文と所見に共通して認められ、瞬時の判断や行動が求められる環境には対応しきれないが、実直で根気よさが求められる仕事には適していると言える。例えば、会計士のように根気よく着実に仕事を遂行する態度と顧客が安心できる穏やかな対応が望まれる分野で実力を発揮することが期待できる。

適材適所と言われる通り、社会においては本人の特徴が生かされ重宝される部署を選択できるように支援することが望まれる。また学校においては「積極的になれ」「社交的になれ」などと本人の性分を無視して一般論や理想論を押し付けるのではなく、本人の持ち味を肯定的に捉え、性分としてできないことはできないという前提の下、縁の下の力持ちとして周囲から信頼されるようなクラス内での役割を担えるように導くことが、本人の自信や満足につながり、周囲も好意的に受け入れることにつながるものと期待される。

⑧④段階準健常群、非定型特徴なし：前後期初頭部低位と定型の著しい崩れ、発動性不足・可変性中程度・亢進性不特定（16歳、男、高校2年：Figure 6^{注17}参照）

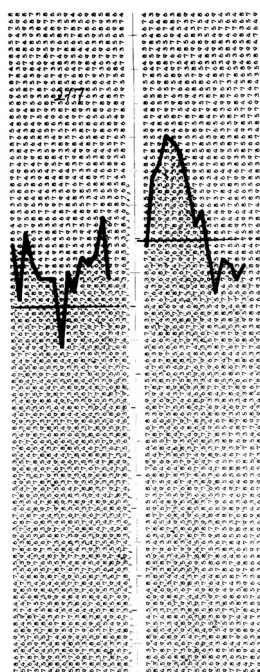


Figure 6. 事例⑧

判定解説 事例①同様に初頭部低位を理由とした崩れの著しさによる判定結果である。また、臨床所見の事例①との類似性にも注目したい。

判定文 気乗りがしにくく取り掛かりが悪い。芯の強さがあり、自主性がある。選り好みをする。容易に肯定・同調しない。

クラス担任による所見 「おとなしく、感情を表に出さず冷静で内的動揺が少なく頼もしい感じ。バスケット部主将に推される。」（外岡1978^{注17}）

考察 準健常群や非健常群で作業曲線の前後期初頭部の低位が指摘される場合、新しい環境に慣れるまで時間がかかるほうではあるが、本人にとって好ましい環境であった場合には自主性の強さが「頼もしい」「信頼できる」という周囲からの評価につながる事例である。

本人に対する好意的な評価は環境によるものであるため、場合によっては協力的でない、愛想がない、などといった理由で集団に馴染めないことも考えられる。これが非健常群等では適応できる環境が限定的となる実態といえる。本人がこのような事情を理解することにより、適応に不足を感じてい

る場合でも、自分に合った環境に行けば受け入れられることに希望を見出せると期待できる。逆に、周囲に高く評価されている場合には、自信を持って行動すると同時に、将来的に適応が困難な環境に身を置くことになっても、自らの特徴を受け止めたうえで対処について冷静に検討し、必要なら専門家の助言を求めるなど、問題解決を目指した行動が取れるよう助言したい。

⑨④段階非健常群、非定型特徴：曲線範囲の過大、発動性不特定（過度）・可変性中程度・亢進性不足（23歳、男、大学生：Figure 7^{注18}参照）

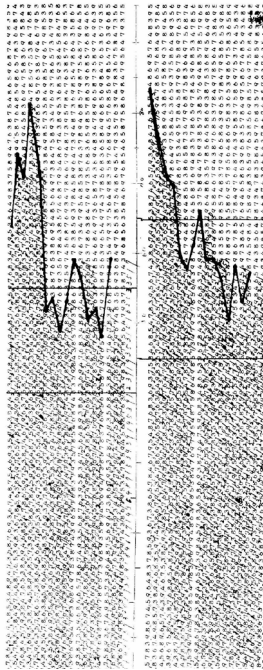


Figure 7. 事例⑨

意欲的である長所が空回りしている状態にあることを受け止めることが第一であろう。職場においては強圧的な上司の下では実力が発揮できない懸念があるため、処遇には配慮が必要であろう。現状を肯定的に捉え、現実的な目標を立て、目標に優先順位をつけることを出発点にして、一度の失敗だけで見放されるわけではなく、やり直すチャンスがあることを受け入れられるよう支援すると同時に、自己肯定的態度を

判定解説 前後期初頭部の抜き出過ぎにより曲線範囲が過大となっており、行飛ばしも前期に2カ所、後期に1カ所ある。強い緊張による疲労から作業量が初頭部から急激に落ちていくことによる曲線範囲の過大である。

判定文 真面目で意欲はあるが緊張しやすくあせって調子を崩しやすいため実力を発揮できないことがある。疲労しやすく持久性に乏しい。

本人談 「疲労感が強く、すぐにばてる。あせりやすい。あれこれしたいことがあり、しなければならないという気持ちがつきまとう。」(外岡1978^{注18})

考察 意欲的に物事に取り組み、高い理想を掲げることは進歩・向上につながるが、過度の要求であると心理的負担が過重となり、実力を証明したい場面で平常心を失い、実力を発揮できないことになる。日常的に背負いきれない重圧を抱えていることが検査への落ち着いた対応を困難にした検査結果と言えよう。

就職を控えている大学生ならば、就職活動を前に意欲が空回りして精神的にも余裕がなくなっていることが危惧される。

とを受け入れられるよう支援すると同時に、自己肯定的態度を育成するよう支援したい。

⑩ A 段階重度非健常群、非定型特徴：作業曲線の著しい動揺、発動性不足・可変性過度・亢進性不特定(13歳、女、中学1年：Figure 8^{注19}参照)

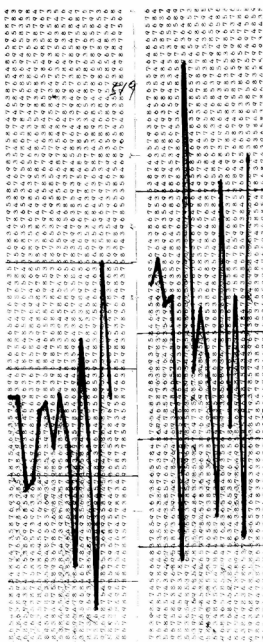


Figure 8. 事例⑩

判定解説 重度非健常群は重度の不適應性ないしは病的な傾向を示唆する結果であるが、時として日常的問題が見当たらない場合もある。本事例は思春期の多感さを反映しているとも言え、作業曲線の基本的骨組みである八の字構造を保ちながらも激しく上下動しているという特徴があり、物事への過敏な反応や被影響性も考えられる。

判定文 過敏で気分や感情に左右されやすく動揺しやすい。気が変わりやすく気分の波が大きい。

クラス担任の所見 「成績もよいほうで、全く問題行動がない。内気、上品、おとなしい。中学1年なのに孤独を好み花や文学を愛好するなど繊細で感受性が高い。」(外岡1978^{注19})

考察 本事例では生来の感受性の鋭さが、唯我独尊で他者との交流を好まず、その分、自然の機微を楽しみ、架空の世界

を楽しむという芸術的感性の発揮につながっているようである。日常的に問題が表面化していないのなら、重度非健常群だからと構えて粗探しをするが如く一挙手一投足を病的兆候と歪曲して解釈することは、かえって本人の苦痛になり、二次的障害に追い込む恐れもある。過敏傾向にある検査結果ならばなおさらである。環境の激変などには対応しきれなかったり、将来的に何らかの問題が生じたりする可能性もあるが、まずは現状を静観し、過敏性について自己理解を支援しながら救済が必要と判断される事態では早急に対処できるよう日常の観察をしてゆくことが、本人の感性を生かし才能を育て、問題発生時に深刻化を防ぐことにつながり、また、本人が自主的に助けを求める心構えを形成することにもつながるであろう。

結論

心理検査とは被検者の現在の行動特徴を説明し、自己理解を助け、問題解決や潜在力の開発を目指すための道具に過ぎない。人間は諸事説明がつくと安心するものであるが、時に断定的に走ることがある。内田クレペリン精神検査では器質的・気質の特徴を診断し自己理解を深め、将来への展望を持つこと、あるいは人材登用の手がかりにするのであり、未知の人物の性格を言い当てることを目的としているのではない。しかし、内田クレペリン精神検査についての理解が不足していたり、説明用語に対する知識が不足していたりといった理由で、利用者が検査結果を解釈の余地があるものとして受け止めることができないという問題があった。

検査結果には、現在観察される行動特徴の背景にある、行動の原動力となる意志や意欲がどのように発揮されるかという、生活体の機能的側面が示されるのである。生活体の行動を時間軸で考えるならば、「始まり—経過—終わり」がどのように実行されるかが反映されるということである。

適応という観点から論ずるならば、一連の行動の始まりでは円滑に本調子を出したい。しかし、先走って失敗したり、なかなか本来の調子が出なかったり、慎重すぎて機会を逃したりすることもある。経過は安定していきたい。しかし、調子の波が大きくムラが出たり、柔軟性や即応性に乏しくなったりして失敗することもある。終わりに際しても問題なく完成させたい。しかし、勢いが止まらず暴走することもあるし、意欲が枯渇して完成に至らない場合もある。

3特性とは、組み合わせによりどのようなパフォーマンスを示す可能性があるかを示す指標であり、各特性が補い合ったり、相乗効果が適応的にも不適応的にも作用したりする可能性がある。また、5類型との組み合わせにより、3特性が様々な条件に対応できる可能性を持っているか、限定的な条件下で対応できる可能性を持っているかを記述するものである。

さらに、非定型特徴は社会的適応において解決が必要な課題を示唆するものではあるが、現在問題があることの証明ではない。作業曲線の深い落ち込みのように、事故の可能性を示す重度の非定型特徴については、職場ならば危険を伴う職種を避けるといった安全確保の対策が必要であるし、学校では器質的障害の有無を確認することで致命的な事故を未然に防ぐことにつながるだろう。ただし、軽度の落ち込みは動作のぎこちなさやうっかりミスといった程度の可能性を示すに留まるものである。

その他の非定型特徴については、特に適応上の問題とされる事情がなく、特技が高く評価されている職場ならば、人間関係でのストレスが生じない労働環境の確保といった配慮が支援となるであろうし、組織の業績向上にもつながるであろう。学校ならば自己理解を援助し、個性を尊重しつつ、適応が困難な環境下に置かれた場合にはカウンセリングなどの支援を求められるように導くことが望まれる。

パーソナリティとは、器質的・気質的特徴を基盤に、学習によって獲得された行動特徴が発揮されたものである。器質的・気質的特徴は、それをどのように引き出すかによって第三者の評価が変わるのであり、周囲から長所と解釈されるように引き出されるのか、短所と解釈されるように引き出されるのかは環境次第、きっかけ次第ということになる。

まとめると、内田クレペリン精神検査の健常度に関する5種類の解釈としては、適応範囲の広さないし環境への順応における柔軟性の指標と捉えるべきで、非健常群等に分類されているからといって、現在、不適応状態にあるとは断定できないことを確認したい。検査結果の運用において、学校相談では問題解決、問題発生や深刻化の予防、能力開発というカウンセリングの基本に乗っ取って検査結果を読み解き、実践的な理解の助けとしたい。また人事考課では人材育成の視点を忘れずに、能力検査や面接の結果と総合した上で、個人の有能さを引き出す人事配置の実現により、個々がストレスを軽減でき、より特徴を生かせる部署で組織に貢献して自信を持てるようにする資料として役立てたい。

内田クレペリン精神検査は被検者の特性を生かせる環境選択のための道具として利用したい心理検査であることを周知したい。

脚注

注1：現在の流通名称は「内田クレペリン検査」である。本稿では開発者の内田勇三郎に敬意を表し、開発時より使用されてきた旧名称「内田クレペリン精神検査」を用いた。

注2：検査結果掲載を快諾くださった日本・精神技術研究所の内田桃人社長に感謝申し上げます。

注3：内田クレペリン精神検査における計算量は基本的に算数能力と無関係であるが、そろばん上級者や商業科生の作業量が多くなる傾向にある。また、D段階は作業量が少なく非定型特徴の診断が困難であることから、加算作業の代わりに印刷数字を○と×で潰す作業によって再検査を行っている。

注4：参考文献に挙げた戸川著『特異児童』では、知的障害を持つ著名な画家について論じている。

注5：定型発見時は後期10分法であった。後に、後期も15分作業にしたほうが亢進性をよりの確に反映することが臨床データにより確認され、現在の測定法が確立された。

注6：前期15分、後期15分の1分ごとの作業量推移をグラフ化したもの。

注7：知的障害のある被検者はD段階となるが、知的障害のない被検者がD段階となることもある。過去には高名な数学者がD段階であった例もある。(日本・精神技術研究所内部データ。判定講習会にて公開。)

注8：健常度に関する5群判定において、精神の障害を持った被検者は非健常群や重度非健常群となるが、非健常群や重度非健常群となった結果が必ずしも精神の障害を示すわけではない。

注9：学校で実施された内田クレペリン精神検査の判定結果説明会にて担任から質問があった事例。所見は著者が担任から直接聞き取った。前後期ともに定型の崩れが認められる検査結果はA段階ならば準健常群であるが、B段階では非健常群となる。検査済み用紙は掲載不可。

注10：日本・精神技術研究所内部データ。同研究所主催の講習会にて公開。検査済み用紙は掲載不可。

注11：典型例は外岡豊彦（1978）臨床詳解 第Ⅲ部図例篇 図例番号492-0439で解説とともに公開。

注12：外岡豊彦（1978）臨床詳解 第Ⅲ部図例篇 図例番号464で公開。

注13：外岡豊彦（1978）臨床詳解 第Ⅲ部図例篇 図例番号410で公開。

注14：外岡豊彦（1978）臨床詳解 第Ⅲ部図例篇 図例番号416で公開。

注15：外岡豊彦（1978）臨床詳解 第Ⅲ部図例篇 図例番号333で公開。

注16：外岡豊彦（1978）臨床詳解 第Ⅲ部図例篇 図例番号324で公開。

注17：外岡豊彦（1978）臨床詳解 第Ⅲ部図例篇 図例番号129で公開。

注18：外岡豊彦（1978）臨床詳解 第Ⅲ部図例篇 図例番号472で公開。

注19：外岡豊彦（1978）臨床詳解 第Ⅲ部図例篇 図例番号171で公開。

引用文献

内田純平（1983）内田勇三郎の学問—息子からみて 戸川行男、外岡豊彦、内田純平（編）
心理学者 内田勇三郎のしごと（pp71-91）日本・精神技術研究所

内田純平（1995）迷留辺荘住人あれやこれや—心理学者内田勇三郎の生き方の流儀 近代
文藝社

戸川行男（1940）特異児童 目黒書店

戸川行男（1979）内田クレペリン精神検査の基本問題と扱い方—意志心理学の立場から
— 日本・精神技術研究所（p114 -110; p 817 -112; p 9116-p1115）

外岡豊彦（1978）内田クレペリン曲線 臨床詳解 第Ⅲ部図例篇 清水光文堂（図例番号
129、171、324、333、410、416、464、472）

参考文献

戸川行男（1979）内田クレペリン精神検査の基本問題と扱い方—意志心理学の立場から
— 日本・精神技術研究所

日本・精神技術研究所（編）（1970）内田クレペリン精神検査 曲線型図例集 改訂版 金
子書房

日本・精神技術研究所（編）（1988）内田クレペリン精神検査 基礎テキスト 日本・精神
技術研究所

安富由美子（1993）内田勇三郎から戸川行男への系譜と展開—内田クレペリン精神検査
を媒介として— 早稲田心理学年報 vol.25, 3, pp107-120

安富由美子（1993）内田クレペリン精神検査 判定実務図例集 F 3 日本・精神技術研
究所

安富由美子（2009）強迫観念の扱いに関する考察 アメリカ研究 vol.3, pp21-36

Received : October, 3, 2018

Revision received : November, 19, 2018

Accepted : December, 5, 2018